

我が願い

自分に都合の悪い一切のもの、境遇や、人物や、行きがかりを捨てて、身軽になることは、誰しも望むことである。

しかし悪い夫を持ちつつ、どうにも出来ぬ人や、病人をかかえて貧しさに苦しみにいた人や、社会の底を覗けば悲惨な事実に充ちている。

私の過去は決して楽なものではなかった。二十歳の春、世の中に出てから今日まで、かなぐりすてることの出来ない苦の中に生きねばならなかった。

しかしそれによつて、人生や自己のほんとうの相もわかり、深刻な宗教的体験の中に生ききらせて頂いたことは有難いと思つている。したがつて、私の信心生活は、恵まれた者の素純な合掌ではなしに、渋い苦いひねくれ者の血の宗教であり、悪逆者の帰命である。

世の荒波にもまれない人は、貴い相をもつ。しかし、物質に困り、人間苦にやつれ、重い荷物に疲れた者は、上品さのかわりに野生の草の強さを持つ。

苦しみは人間を曠野の人にする。盆栽は毎日水をもらい、虫を除かれるが、野の草は、幾十日続く^{ひたひた}旱とも戦わねばならない。

如来の願心は、曠野に動く。

捨てることの出来ない桎梏の中で苦しみにぬれている人々が、私のこれまでの友であつた。これからもまた、こうした宿業に泣く人が私の一生の友であろう。私はそれで満足である。

自分一人が食つて行きさえすればいいような人、そうした人が少し奮発すれば、成功者になったり、相当な地位を得たりすることが出来よう。恵まれて社会的に伸びきる人も必要である。

しかし一切を捨てて野に埋れることも、また、悔いなき嬉しい生き方である。

現代の才子は、他人を葬つて自己を現わそうとする。有名にして虚偽なることが現代の一の世相である。

しかし、山の間、谷の奥にも、無名にして真実なる人がある。この無名にして真実なる人こそ、我が真の友である。

自己の存在を地に埋めて、聖賢の徳を顕せ。

聖賢を踏み台にして、自己を売つてはならない。

大法は、聖賢の説きたまいしものであり、実践されたものであるが故に、大法は聖賢の名において語らるべきもの、自己の賢明を現わす材料としてはならない。

「如是我聞」とは説き教えたもうを聞く態度であつて、「是の如く説く」のではない。七高僧を聖賢の王座に奉戴して、自らは愚禿と名告つて野に埋れた者、即ち我が親鸞聖人である。

私はかつて、「汝、立身出世せよ」と語つたことはない。立身出世が悪いのではないが、立身出世を目的にする生き方のみが人生ではない。

貧しい老婆の一人をも捨てないのが、釈尊であり、親鸞聖人であった。六字を通さねばものを見ることの出来なくなった私にとっては、老婆も、博士も同一のものに映ずる。

仏教においては、人格最高の位置、正定聚不退の菩薩位は、博士必ずしも許されず、老婆必ずしも拒まれず。私はただ、老婆にすら許される唯一絶対なる道をのみ歩みきりたい、との願いに燃えている。

念仏道とは自己充実の道である。

み法によつて汝を充たせ。

充実した種子を大地に埋めよ。

み法に充実した汝を煩惱生死の大地に埋めよ。

念仏の華は、大地に咲く。

時は、劫初より尽未来際に流れ、処は尽十方にひろがる。

この豎と横との十字点、即ち、今であり、此処であり、汝自身である。

霞の彼方に処を求めず、幻の彼方に時を求めず、

今、此処に、喜びなく、光なく、意義なく、信なく、精進なく、願なく、力なくして、いずれの時、いずれの処に、真の生活があるう。宗教があるう。

如来は、豎に無量寿であり、横に尽十方無碍光である。

時と、処との十字点、即ち如来願心の動くところ、

現実の信となつて、衆生の上に顕現す。

現実^ニに充たされ、現実^ニに満足す。

力も、喜びも、光も、道も、ただ現実^にのみある。

一人娘に死なれ、養子も病死し、嫁も先だち、老の身の孫と共に残り、しかもわずかの財産は数年間を病床に送つた人たちによつて消え、荒屋にわずかに雨をしのぐ老婆が、

「先生、私は有難いことにして頂きました。」と手をすつて喜ぶ。

法悦の色、外にあふれ、歡喜、身にもあまる風情である。

「婆の心の中には、鬼か大蛇か、おそろしいものしかありません。」

「それでは、それを助けてくれと言うのではないか。」

「ちがいます〜。南無阿弥陀仏。」

ああ、老婆にして、菩薩大士の心を知り、仏智に通うて自身を知り、慚愧によりて絶対人格の王座に帰り、仏恩にさめて、仏凡一体の境に遊び得たか。

生死はつかの間である。

如来のみ無量寿にして金剛不壊である。

如来広大の功德、我が生活に顕現したまえ。

生死を不滅の願力に托し、苦樂を超えて、
群生と共に、至尊の生命に生きん。
招喚に生きん。
ただこれ我が唯一の願いである。